

我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

◎ 第八話 ヨッセさん（大祖母よし江）

祖母キク＝勝子とは対照的に姉のよし江（私の大祖母である）は内面的で思慮深い聡明な少女であった。

祖母はまだ大阪に居た頃、夕闇迫る中、よし江がうちに帰ってくると、水甕から柄杓で一杯、水を飲み、「橋のたもとで男が別の男を刺し殺すんを見たんや」と言ったのを覚えていた。

私はこのエピソードを思い起こすと、文楽の「夏祭り浪花鑑」で主人公の団七郎兵衛が夏の闇の中、祭り太鼓がトントコトントコ、トントコトットン、トントコトコトコ、トントコトットンと鳴る音を背に井戸端で、舅の義平次を刺し殺してしまう凄惨なシーンが二重写しになる。明治末年の大阪の夜は、江戸時代と同じ闇を抱えていたのだ。

祖母と大祖母よし江は対照的な性格ながら、祖母は大祖母を「ヨッセさん」（よし江さん）、大祖母は祖母を「カコちゃん」（勝子ちゃん）と呼び合って気の合った姉妹だった。祖母は「ヨッセさんは賢い女やった」とよく語っていた。

仁尾へ帰ると、大祖母よし江は、小学校、尋常高等小学校を通して学年で段トツのトップで通した。校長先生が「お金はこちらで持ちますから、是非、女学校へやっつけて下さい」と頭を下げてきたほどだ。

だが、あれほど賢明な曾祖母コヲはなぜか生涯、数少ない痛恨のミステークを犯してしまふ。「貧乏人の子が上の学校やか、行かんでええ！」と拒否したのだ。曾祖母は近代の制度とその上に開ける近代的キャリアに対して不信を抱いていたのかもしれない。

大祖母よし江は何も言わず、曾祖母の言葉を受け容れた。

その後、よし江とキクの姉妹は、瀬戸内の対岸、倉敷の製縫工場で女工をしたこともあったようだが、慶吾の商売が軌道に乗ると、仁尾に帰り、花嫁修業に励む。

そして、よし江は仁尾の大商家、大阪屋の跡取り息子、柴尾藤吉と祝言を挙げた。



江戸時代からの人形店。張り子の虎が名物で、首が縦に振れる